

志教育参考資料集

大河原教育事務所管内の偉人Ⅲ

～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～

志

宮城県大河原教育事務所

書 : 佐藤 奎山 氏

発刊にあたって

平成23年度から始まり本年度で三年目となる志教育参考資料集「大河原教育事務所管内の偉人Ⅲ～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～」を発刊できましたこと、大変うれしく思います。これもひとえに管内教育委員会、小・中学校の御協力のたまものと御礼申し上げます。

多くの方々に御協力いただき、第3集まで続きました志教育参考資料集も、本年度で一区切りとなります。本冊子が、「先人の生き方」を学ぶ教育活動のデータベースとして御活用されていることをたいへんうれしく思います。

「大河原教育事務所管内の偉人Ⅰ」に掲載された「館矢間の偉人、佐藤清右衛門『阿武隈川に橋を！』」を取り上げた丸森町立館矢間小学校の道徳の授業実践を伺う機会がありました。地元地域で活躍した先人の生き方をモデルに、児童個々の志について深く追求させる実践です。その集大成として、児童の感想から言葉を集めて作詞し、それに先生御自身が曲をつけて合唱曲を完成させ、学習発表会や町音楽祭などで発表されたと伺いました。この学習活動などは、志教育のみならずふるさと教育の先進的な実践事例の一つと言えるのではないのでしょうか。

各学校におかれましても、これまで様々な実践を積み重ねていることと思います。今後も、志教育推進のために創意工夫を凝らした実践が数多く展開されていくことを期待してやみません。

社会が大きく変化する中で、自らの適性を理解し、社会の中で果たすべき役割を将来にわたって展望し、その実現に向けて強い意志を持って行動できる人づくりが求められている今、子どもたちが「夢を持ち、志を成し遂げた先人の生き方」を学ぶことは大いに意味のあることと考えます。

本冊子では、初年度45名、昨年度21名、今年度18名、3年間で計84名の身近な郷土の偉人を紹介することができました。本冊子が、志教育推進の一助になれば幸いです。

結びに、三年間にわたり本冊子を発刊するに当たりまして、資料を作成いただきました校長先生をはじめ担当された先生方、教育委員会担当者の方々、また、御協力いただきました関係各位に心より敬意と感謝を申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成26年2月

大河原教育事務所

所長 桂島 晃

目 次

1 発刊にあたって

大河原教育事務所長 桂島 晃

2 大河原教育事務所管内の偉人	市町名	ページ
松窓乙二(しょうそうおつに)	白石市	1
鈴木梅子(すずきうめこ)	白石市	2
白石正雄(しらいしまさお)	角田市	3
佐々木初吉(ささきはつきち)	蔵王町	4
真田幸歎(さなだこうかん)	蔵王町	5
太田麻之助(おおたあさのすけ)	大河原町	6
伊達宗高(だてむねたか)	村田町	7
田山利三郎(たやまりさぶろう)	村田町	8
齋藤弓弦(さいとうゆずる)	丸森町	9
安藤重三(あんどうじゅうぞう)	丸森町	10
大槻正路(おおつきまさみち)	丸森町	11
引地徳郎(ひきちとくろう)	丸森町	12
大内晋(おおうちすすみ)	丸森町	13
高野正道(たかのまさみち)	丸森町	14
本多三學一世(ほんださんがくいつせい)	丸森町	15
佐藤萬(さとうよろず)	丸森町	16
八島考二(やしまこうじ)	丸森町	17
目黒玄安(めぐろげんあん)	丸森町	18

しょうそう おつに 1756年 1823年
松窓 乙二 (宝暦5年～文政6年)

【主な業績】 文化文政時代の俳人，句集に「松窓乙二発句集」。注釈書「蕪村発句解」。

【業績の概要】



乙二は、宝暦5年(1756)、白石市亙理町にあった千住院という修験の家に生まれました。修験というのは山にこもって修行をして不思議な霊力を身につけた者をいいます。

乙二は千手院六代清馨(せいけい)の長男として産声をあげました。本姓を岩間、名を清雄(せいゆう)といました。「松窓乙二」は俳句のときに使う名前です。俳名は乙二と書いて「おつに」と読みます。名前の由来はよくわかっていないのですが、甲一が最高位をあらわすのに対して、謙遜の意味を込めてつけたのではないかとの見方もあるようです。

乙二が修験という身でありながら、あまり似つかわしくない俳譜の道に進むようになったのはなぜでしょうか。恐らくそれは父・清馨の影響が大きかったようです。清馨は隣々舎麦羅(りんりんしゃばくら)を俳名とした俳人でした。乙二もこの父の血を受け継ぐとともに、父から厳しい指導を受けました。古事記・日本書紀・古今集・山家集などの古典も愛読していたようです。

最初に俳句を作ったのがいつの頃かはわかりませんが、乙二が17歳のとき、

千代の数貝まいらせよ伊勢の蟹(あま) (蟹とは海で魚や貝を取ることを業とする者のこと)の句を残しています。また、与謝蕪村の旅の様子を書いた「新花摘(しんはなつみ)」によると、安永6年(1777)5月、白石に泊まったとき、23歳の若い乙二の句なども見たのでしょうか。その後の乙二に大きな影響を与えたようです。乙二は俳人を目指すには恵まれた環境の中で青年時代を過ごしました。

その後の彼の人生は、京都への修験としての修行の旅をはじめとして、松尾芭蕉のように旅をすみかとしたものになります。修験としての修行は、俳句修行でもあったようです。天明2年に蕪村の七部集の一つ「五車反古」に乙二の句が入選しました。

鐘氷(かねこほ)る俊恵(しゅんえ)が寺の寐(ね)ざめ哉

この入選を境に江戸の俳人たちとの交流を盛んに行うようになりました。この時代の一流の俳人であった夏目成美のもとに50日も滞在しています。当時の江戸文芸界でも乙二は一目おかれた存在になっていたのでしょうか。

50代になると数多くの旅に出ています。蝦夷地には2度も旅に出ています。1回目は文化7年から文化10年にかけてであり、2回目は、文政元年から文政3年にかけてです。2回目の蝦夷地渡航の時は63歳でした。これだけでも飽き足らず、北陸道から中国地方への計画をしていますが、病魔が襲い断念せざるを得ませんでした。



白石市益岡公園内句碑

乙二は生涯で2000あまりの句を残し、東北の各地に数多くの門人を育て、東北文化の発展に偉大な足跡を残すことになりました。

【資料提供：白石市立白石第二小学校】

すずき うめこ 1898年 1973年
鈴木 梅子 (明治31年～昭和48年)

【主な業績】 詩人

【業績の概要】

“こけしはなんで かわいいか おもうおもいを いわぬから”

この詩は、有名な詩人・堀口大学が梅子を思い描いて作った作品と言われています。堀口大学の弟子として、生涯にわたって詩作の指導を仰いだ“孤高の詩人”鈴木梅子とはいかなる生涯を送り、どんな詩を残したのでしょうか。

梅子は明治31年3月、福島県信夫郡鳥川村の大豪農・矢吹友右衛門、シンの長女として生まれました。本名はムメといい、梅子は作者名ですが、いつの頃からか周囲も梅子と呼ぶようになりました。矢吹家は福島県内屈指の家柄で、何不自由なく少女時代を過ごした梅子は、十代の頃から短歌を始め、行き着いたところが詩の創作でした。

彼女が17歳の昭和4年、白石温麺を作り、片倉小十郎から味右衛門の称号を与えられた「大味」の16代・鈴木俊一郎と結婚し、白石の人となりました。その頃の鈴木家は多角経営を行い、町の経済を一手に治め、その豊富な財力は宮城県下でも十指に数えられていました。

そんな中、第一次世界大戦の休戦とともに、東京株式市場が大暴落し、鈴木家の事業も窮地に追い込まれます。梅子は、結婚してすぐ、日本の大変動の中であえいでいる鈴木家に嫁ぎ、封建社会の象徴のような家で、苦難の人生を歩み始めました。

そんな梅子に一つの光明がさしました。大正6年長男基弘を出産したのです。後に「昔がたり」という詩で、その時の喜びをこう読んでいます。

“多忙な母を坐らせて よく世界地図を拡げた 子。 この中の何処にいちばん行きたい？
と 問うた 子。 ローマの廃墟を見たいと 答へた母。 やがて飛行機が自由に世界の空を
駆けめぐる日が来るから 生きてみて と よくいうた子。 四十年前の ものがたり”

堀口大学との運命的な出会いは、大正の終わり頃に訪れました。結婚前から病弱だった梅子は、千葉県保田の別荘で療養している時、大学も近くに別荘を持っていたことから偶然知り合いました。以後梅子は大学を師と仰ぎ、32歳の時に弟子入りしてから30余年間、師弟関係は途絶えることなく続きました。梅子は大学との出会いを契機に、更に詩作に情熱を傾けました。

その後も苦労が続きます。昭和の時代に入ると昭和大恐慌、世界大恐慌で鈴木家の家運も傾きかけます。更に太平洋戦争に一人息子の基弘が招集され、生きるしかばねのような状態で生還します。昭和29年に夫俊一郎がこの世を去り、心の支えであった一人息子も昭和36年、父の後を追うように亡くなりました。その思いを「断腸」という詩で読んでいます。

“呼吸（いき）を絶えた。 冷却（ひえ）るわが子を かき抱き 頬ずりをして
又 わが呼吸のもとに 絶えよ と。
母ひとり 子ひとり いまは娑婆明暗の表裏となって 呼び合ふか？
声なき きづな 身もだえて 空に もつれる”

昭和48年11月30日「水を飲みたい」とか細い声で言い、うまそうに一口飲むとすぐに梅子は目を落しました。享年76歳でした。苦難続きの人生の中で、梅子の詩は悲しい女の命の歌でありました。歌うことで梅子は生きることへの喜びを探し当てたのです。

“べこのせなかには あたたかい のってなでれば よろ
こんで せなかでおうたを うたいます”

現在でも白石市第一幼稚園の園庭にある“べこ石”に上記の鈴木梅子直筆の詩が刻まれています。これからも子どもたちを温かく見守っていくのでしょうか。



白石市第一幼稚園の園庭にある「べこ石」

【資料提供：白石市立白石第二小学校】

しらいし まさお 1916年 2001年
白石 正雄 (大正5年～平成13年)

【主な業績】 東根診療所開設<昭和22年>から58年に渡り、同診療所ひとすじに勤務、地域医療の充実と発展に貢献

【業績の概要】

太平洋戦争直後、伊具郡東根村（現在の角田市東根地区）は、東根村産業組合設立の「健康保険組合」はあったものの、肝心の医師がいない“無医村”でありました。このままでは、組合の実効性が薄くなるばかりか、住民の健康維持も保障できないことから、診療所設置の機運が高まりました。かくして昭和22年4月国民健康保険診療所が開設され、白石が赴任しました。



白石 正雄 氏

白石は、大正5年、宮城郡根白石村（現在の仙台市泉区）の農家に生まれました。子どもの頃、父親の病気で往復40km程かかる往診を依頼した折、その高額な往診料に母親が途方に暮れていた姿を見て、医者になり無医村地域の人々を救ってあげたいと決心したといっています。昭和16年、満州に渡り、独学で学位を取り、満州鉄道株式会社診療所<結核診療所>に勤務。白石はここで研さんを重ね、結核患者の診立ての良い医者として成長していきました。

昭和20年に復員し、翌21年、宮城県庁衛生部予防課に医師として勤務。ある時、上司に「この食糧事情の悪い中、銀めしを腹いっぱい食えるところで働いてみたいですね」と、冗談半分、本心半分で語ったところ、ちょうど医師の派遣を要請されていた東根村を紹介されました。子どもの時に心の中に灯した志を、ここで大きく広げよう…白石はためらいなく東根行きを決心しました。東根村に赴任後も、医療従事と並行して東京医科大学に入学し、専門部研究科で2年間の研究を重ねて卒業するなど、地域住民の健康のため、飽くなき努力と研さんを積みました。

白石は“おらほのお医者さん”として、58年間、地区民の心のよりどころであり続けました。平成12年3月、体力の減退を理由に惜しまれつつ引退し、翌13年、逝去。これ程までにこの東根の地に親しみを感じ、地域住民に溶け込むことができたのは、ひとえに白石の温かい人間性に起因します。寡黙にして温厚、一途に信じた道を突き進まんとする気概、住む土地を愛しそこに生涯を捧げる崇高な精神は、今もなお東根地区住民の間に、感謝と敬意をもって語り継がれています。

（参照資料：角田市東根公民館編集「東根の郷土史～ふるさとの地名・人名～」，

〃 「白石先生の思い出文集・おらほのお医者さん」

【資料提供：角田市立東根小学校】

さ さ き はつきち 佐々木 初吉 (明治～)

【主な業績】 果樹栽培（梨）の普及

【業績の概要】

大正時代、蔵王は果樹生産の先進地でした。当時は宮の桃、円田の梨、矢附のブドウなどが有名でした。江戸時代末期に桃が宮向山に植栽された記録があるほどです。

梨の栽培は明治20年頃に円田で試作されました。この試作を行ったのが、当時の円田村の役人をしていた佐々木初吉でした。明治の初め頃、山形からきた人が円田の谷地山で栽培していた梨の木には見事な実が成っていました。初吉はその実をごちそうになりました。するとたいへんおいしかったのです。

「これをたくさん栽培して、いろいろなところで販売できないだろうか。きっと村は豊かになるにちがいない。」

当時は米作りや野菜づくりの他、この地域では養蚕業が盛んでしたが、けっして豊かな生活ではありませんでした。初吉はさっそく谷地山の人に頼み、苗木を取り寄せてもらいました。そして、苗木の育て方を教わりながら梨の栽培を始めました。努力のかいがあつて、栽培は成功しました。大きな梨の実がたくさん成りました。

「よし、これでここでも栽培ができることが証明できたぞ。」

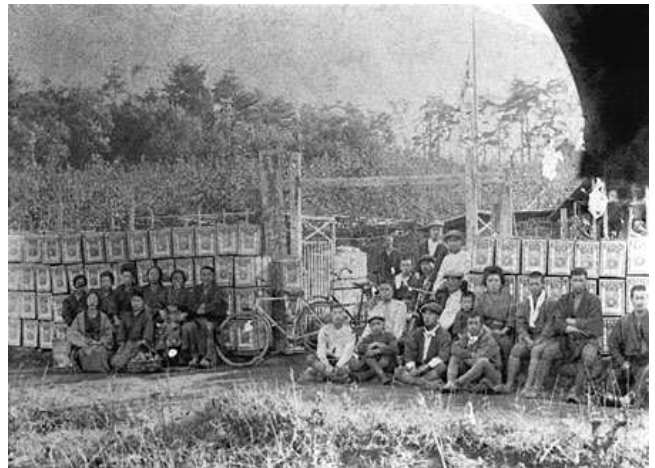
初吉はうれしさのあまり夜も眠れないぐらいでした。ところがです。当時は果物がとても珍しい時代でした。夜のうちに次々と盗難にあい、収穫することができませんでした。初吉は困りました。

「誰が梨の実を盗んだかを調べることも、もっと広く栽培を行って、販売を手伝ってもらうようにすれば、村人に賃金を払うことができる。なにより村人の生活が豊かなものになる。」

初吉はそう考えて、自分の屋敷脇の畑のうち6アールを梨の栽培用として本格的に植栽しました。一人では大変な仕事になります。村人にも手伝ってもらいました。月日はまたたく間に過ぎました。梨の苗木を始めて植えてから27年が経ちました。とうとう本格的な梨の栽培が成功したのです。

「よし、これを売ろう。」

初吉は大正2年（1913）に梨の出荷を行いました。行き先は仙台でした。梨を生産し、それを販売するという事業はこれが初めてのことでした。木製のランプ箱に約20キロの梨を入れてから、きれいに飾り付けをし、家紋を付けた馬一頭に、8箱（約160キロ）をのせ、数頭の馬で出発しました。出発のときには、打ち上げ花火も上がりました。初吉はこれまでにない事業を成功させたのでした。その後梨の栽培は盛んになり、遠くは東京や大阪まで出荷をした時期もありました。



梨栽培をはじめた頃（出荷の様子）大正初期

平成25年、蔵王の梨は出荷100年を迎えました。初出荷の年に植えた梨の木も、すでに100歳をすぎましたが、今年もたくさんの梨の実を結んでいます。

（参考資料：蔵王町史）

（掲載写真：蔵王町文化財保護課 提供）

【資料提供：蔵王町立宮中学校】

さなだ こうかん きへいた 1874年 1887年
真田 幸歆 (喜平太) (文政7年～明治20年)

【主な業績】 江戸時代末期の仙台藩士、仙台真田氏（真田幸村の子孫、真田幸清の子）

【業績の概要】

江戸時代末期、ペリー率いる黒船の来航以来、日本は、大きく揺れ動いていました。仙台真田氏九代目当主真田幸歆は、幕末から明治維新にかけての激動期にあつて、仙台藩の藩政をよく支えた人物です。

幸歆に命じられた役目は、西洋学問および砲兵術の研究担当、藩の砲術兵法全般の師範などで、文武両道というにふさわしい活躍ぶりでした。

また、時流を見据えた上で必要な策を練る才能にも恵まれており、藩の兵制改革、学制改革、人材育成、治安回復などに関してたびたび建言を行いました。しかし、建言の大半は採択されませんでした。当時の仙台藩では、保守的な政治が行われており、幸歆の先進的な考えは理解されなかったのです。

幸歆の建言の一つに「郡県制関白」があります。これは、大政奉還の報を聞いた幸歆が仙台藩主慶邦に建言したもので、「天皇による政治体制を実現するには、諸大名の領地、人民をすべて天皇に返し、郡県制による統治を行う必要がある。」という案です。幸歆は、この案を慶邦が最初に提案することで、伊達氏が新政権の主導権を握ることができると考えたのです。

幸歆が建言した郡県制は、後に明治政府がとった「版籍奉還」「廃藩置県」「郡県制導入」などの政策に通じるものがあり、幸歆の卓越した先見性がうかがえます。

慶応4年（1868）幸歆は、軍の目付役になります。天皇中心の新たな時代に向かうと読みきっていた幸歆は、反朝廷勢力の会津藩への出兵命令が朝廷から下されたとき、会津出兵に積極的に協力することで仙台藩を守っていこうと考えました。

幸歆の見識の高さから、敵方である官軍参謀の世良修蔵ですら、「先生」と呼び尊敬の態度を崩すことはなかったということです。

しかし、幸歆の考えは採用されず、隠退しました。その後、東北諸藩を中心に奥羽越列藩同盟が発足しますが、9月に仙台藩は降伏、幸歆の読みどおりの結末を迎えたのでした。

この騒乱の後、伊達氏の領地は、28万石にまで減封され、多くの家臣が召し放ち（解雇）となりました。幸歆は、俸禄25俵で引き続き召し抱えられましたが、明治4年（1871）明治政府が「廃藩置県」を発令し、仙台藩が終焉を迎えたのを受けて俸禄を返還しました。

明治の世になってからの幸歆は、牡鹿郡石巻町（現在の石巻市）に暮らし、学校教育関係の事務官や牡鹿郡の書記官などを務めました。明治10年（1877）に西南戦争が勃発した際、政府から県内の旧藩士より巡查700名を募集し、藩内でも特に人望のある者をその総長とするよう指令がありました。幸歆はその総長に推薦されるも辞退しました。

幸歆は、人望にあつく機知に富み、武芸に秀でた人物で、仙台藩の行く末を正しく導いていくことができる稀有な存在でした。もし、幸歆の建言が採択されて仙台藩の改革が実現していたら、明治維新後の歴史は大きく変わっていたと考えられます。

（参考資料 蔵王町の歴史と文化財公式ホームページ

歴史解説 仙台真田氏 地域に伝えられた名将真田幸村の血脈）

【資料提供：蔵王町立永野小学校】

おおた あさのすけ
太田 麻之助 (1891年~1977年)
(明治24年~昭和52年)

【主な業績】 裏作東北一と呼ばれる「裏作の里」として、自家水田を試作田に裏作の有効性を身をもって示し、近隣農家を啓蒙督励した篤農の士

第1回河北文化賞受賞(昭和27年1月)

【業績の概要】

生まれは村田町。大河原産業組合の設立し、その組合の常務理事、業会の専務理事、大河原町総務課長等を歴任し、戦後は農業経営改善に没頭し、水稻栽培及びその裏作に新機軸を生み出した篤農の士でありました。

当時、大河原町は狭小な耕地しか持っていない零細農家が多く、土地生産性も労働生産性とも低く、戦後も困窮・飢餓にさいなまれました。当時の町長は水田裏作を提唱して二毛作や多毛作による「三色運動(農業改良普及事業)」を推進していました。その実践者として太田麻之助は、自家水田を試作田として提供し、自ら耕作し、裏作と水稻直播に尽力しました。その実績を買われて柴田郡内の精農家(収穫量の多い農家)の代表として昭和26年2月柴田郡精農会長となりました。

毎年、春には、大河原耕土は麦の緑と菜の花の黄色、それにレンゲの紫が縞模様を織りなし、実り豊かな桃源郷となりました。そして、昭和25年には当時の農林大臣広川弘禅をはじめ労働大臣鈴木正文、山添農林次官らが来町視察し、翌26年には衆議院農林委員団一行が来町してつぶさに実施状況を視察しました。昭和26年度には全町水田面積の7割に裏作が実施されるようになりました。

このようなことから、当時、大河原町は「裏作の里」として全国的にその名が知られ、昭和26年度の視察者は1万人を超えるほどでありました。

昭和27年1月17日、河北新報社の事業として創設された「第1回河北文化賞」に『裏作の協同化と普及』を推進指導した大河原裏作農協組合長であった太田麻之助が、その功績が顕著であるとして受賞しました。河北文化賞は、東北地方の文化、産業振興に寄与した人々に贈られる賞です。

稲刈りの済んだ田はたちまち掘り返されて、麦畑や菜種畑に変わっていきます。初夏には麦秋の畑が次々と青田に変身します。農家が見せる田面の移り変わりは労苦を忘れさせる趣がありました。

しかし、終戦の混乱期を乗り越えて、新生大河原町農業の前途に、希望の灯をともしたこの裏作も、朝鮮戦争を契機とした我が国経済界の高度経済成長の波にもろくも吹き消されてしまうのであります。

【資料提供：大河原町教育委員会】

だて むねたか 1607年 1626年
伊達 宗高 (慶長12年～寛永3年 江戸時代初期)

【主な業績】 村田城主(村田伊達氏)として3万石を領有 刈田岳火山鎮護の祈禱
官位：従五位下，右衛門大尉，諸大夫

【業績の概要】

慶長12年(1607)，仙台藩主・伊達政宗の七男として仙台の青葉城で生まれ，幼名は長松丸といました。

このころ村田町は，交通の要所と軍事的拠点として重要視されていました。そこで，慶長18年(1613)，柴田郡小泉を領していた一族・田手宗実(伊達氏庶流)の養子として宗高が送り込まれ，田手氏の名跡を継ぎました。この時，田手氏庶流を含む宗実の家臣団の一部が宗高の家中に編入され，宗実ら元々の田手氏は小泉氏へと改めさせられました。しかし，宗実の所領は宗高には引き継がれず(のち実子の高実に引き継がれる)，宗高は新たに柴田・刈田両郡で3万石を拝領し，数え7歳で村田城主となりました。

元和9年(1623)4月16日，刈田岳が噴火し，噴石・降灰等により領内に甚大な被害が生じました。人々を恐怖に陥れたこの噴火は，年が明け寛永元年(1624)になっても収まる気配を見せません。そこで，伊達政宗は中国人の易者・王翼に，祈禱によって噴火を静めるよう命じました。

寛永元年(1624)10月5日，宗高は藩主名代として王翼と共に刈田岳を登り，火口近くに祭壇を設け，噴煙と降下物にさらされながら，これに耐え祈禱を行いました。節の付いた青竹に自分の息を吹き込みそこに埋めましたが，このことは宗高の生命を捧げたことを意味するものでした。祈禱が終わる頃には噴火活動が次第に静まり，夜にはまったく止んだといます。そのため，人々は宗高の祈り・真心が天を動かしたのだと噂しました。宗高は幼少の領主でしたが，この刈田岳での崇高な行為など善政を行い，領民から慕われました。

寛永3年(1626)4月，兄の忠宗・宗泰と共に江戸に上り大御所・徳川秀忠と将軍・徳川家光に拝謁。5月には家光参内への随従を命じられた政宗と忠宗に伴われて上洛し，従五位下・右衛門大尉に叙任されました。しかし，帰国を前にして宗高は天然痘にかかり，8月17日に宿所の京都二条要法寺で客死しました。享年20歳。

9月7日，京から村田へ戻った宗高の遺骨は龍島院に埋葬され，同日家臣10名が殉死しました。殉死者の墓は，宗高廟への参道の両側に配置されています。宗高に子どもはいなかったため，村田伊達氏は無継断絶となりました。

宗高の急逝は，領民にも衝撃を与えました。領民の間では，刈田岳で宗高が行った祈禱は，自らの命と引き換えに噴火を静めることを願った「命願」であったと信じられ，村田をはじめとする柴田・刈田の宗高旧領の住民たちは，今日に至るまで折に触れてその仁慈を讃えています。天保3年(1832)8月には，柴田・刈田両郡の住民が龍島院の境内に一对の石灯籠を献納し，大正15年(1926)には，升敏之助らを發起人として刈田岳山頂に「伊達宗高公顕揚碑」を建てました。昭和42年(1967)8月9日には，同じく刈田岳山頂に「伊達宗高公命願碑」を建て，併せて廟・墓所・灯籠などの修築が実施されました。

村田町では，墓所の龍島院において，毎年8月17日に「宗高公まつり花火大会」を開催しています。



伊達宗高御廟(龍島院)

【資料提供者：村田町歴史みらい館】

たやま りさぶろう 1897年 1952年
田山 利三郎 (明治30年～昭和27年)

【主な業績】 昭和の海洋学者・我が国珊瑚礁研究の権威・理学博士
【業績の概要】

田山利三郎は明治30年1月26日村田町に生まれました。医師田山利右エ門氏の弟で、村田小学校に入学し、卒業しました。

卒業してから師範学校を受験するため、2年間牛乳配達をしながら、一日も休まず大河原の高等小学校に通学しました。その後、宮城県師範学校に進み、そして、福島・札幌等で今の高等学校にあたる学校で先生をしました。

それでも、自分ではまだ勉強が足りないという頑張り、東北帝国大学(現在の東北大学)に入学し、地理を専攻し、昭和2年に卒業しました。利三郎は東北帝国大学理学部助手で理学士となり、さらに教授となり、地質学の先生をしました。調査のとき、一日も休まず通学し鍛えた丈夫な足で方々の山々に行き、縦横に歩きまわるところから「重タンク」という名を大学の学生から名付けられ、学生から慕われていたそうです。そして海洋地理学の権威者として世界の学者となりました。その後、南洋熱帯産業研究所に入り10年間、南洋開発のため真っ黒に日焼けしながら南洋の島々を一つ残らず研究し、ついに南洋群島における燐鉱の分布や地形・地質・珊瑚礁などの研究論文を発表しました。

昭和22年には、海上保安庁水路部の測量課長となり、母校東北帝国大学の教授もしていました。

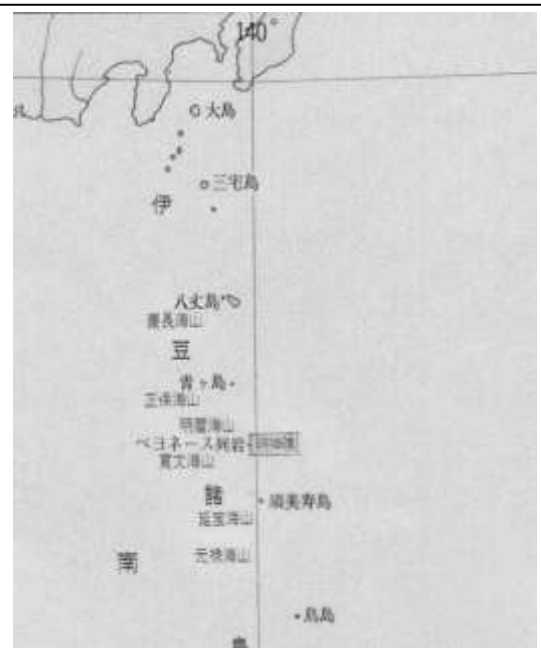
1952年(昭和27年)9月17日、東京都の伊豆諸島南部にある海底火山で噴火があり、その噴火を報告した静岡県焼津市の漁船「第十一明神丸」にちなんで明神礁と命名されました。その明神礁は激しい火山活動を繰り返し何度か新しい島をつくりましたが、自らの爆発で島がなくなることもありました。そこで、学術調査と水路保安調査のため、海上保安庁「第五海洋丸」が9月23日横浜港を出発しました。9月24日夜8時、船との連絡が取れなくなり、9名の海上保安庁の調査員と22名の乗組員、計31名が、明神礁の海底火山が爆発して500トンの第五海洋丸と運命を共にされたという新聞・ラジオの報道がありました。しかも、その船に村田町出身の田山博士が測量課長として乗っており、遭難殉職したのです。村田町出身の学者を突然失ったことは、村田町はもちろん、日本いや世界の学術界のために大きな損失だったに違いありません。利三郎の得意とする海洋海底の研究に一生をささげられ、学問の研究に殉ぜられたことを思うと、学者として本望ではなかったかと思われま

す。利三郎の大好きな言葉は「体は野蛮に、頭は文明に」だったそうです。この言葉は人の一生は努力・忍耐の連続であり、何事をするにあたって、体が丈夫であることが何より大切なことを言っていると思われま

【資料提供：村田町教育委員会教育総務課・歴史みらい館】



田山利三郎氏と家族



明神礁

1990年12月20日発行
小学館「日本列島大地図鑑」より

さいとう ゆずる 1881年 1974年
齋藤 弓弦 (明治14年～昭和49年)

【主な業績】 日本画会展・明治絵画会展・文部省美術展・第二回帝国美術展入選

【業績の概要】

「亀治は絵がうまいな。」と友達は亀治さんのかいた絵にいつも感心しました。亀治さんは絵をかくのが大好きで、時間をみつけてはいつも絵をかいていました。小学校を卒業してから、家の仕事の農業を手伝っていましたが、暇をみつけては、大好きな絵をかくことに熱中しました。亀治さんは将来、画家になりたいと思っていたのです。来る日も来る日も亀治さんは絵をかくことに没頭しました。時には、農作業をそこそこにして絵をかくこともありましたが、亀治さんは画家になることをあきらめきれず、(東京に行って、絵の勉強がしたい。) と思いました。

「亀治は、東京に行って絵の勉強がしたいらしい。ここらで絵がうまいといっても東京では成功するはずがない。」「画家でお金を得るのは大変なことだ。ここで農業をやっていればいいのに。」と言う人もいました。

亀治さんが、20歳の時です。亀治さんは画家になることを決心し、東京の伯父をたよって上京しました。東京での亀治さんの生活は決して楽なものではありませんでした。東京に出て、1年半は人力車を引く仕事をしたり、馬の世話をしたりしながら絵の勉強をしました。

その後、亀治さんは土佐派の日本画家小堀ともねのもとで、3年間住み込みで修業しました。修業は大変厳しく、修業は同じ図柄を繰り返し繰り返し丹念に描くというものです。この頃、先生から弓弦(ゆずる)の号をいただき、明治37年(1904)、弓弦(亀治)さんが24歳のとき、小堀門から独立し、さい仙とも号し、熱心に絵を描きました。そして、日本画会展、明治絵画会展に入選、文部省美術展には3度も入選するなど、すばらしい作品を数多く制作しました。大正9年(1920)40歳の時、第2回帝国美術展に「雪月花」が入選しました。昭和12年(1937)戦時下に入り出征兵士の武運長久を祈るような作品を描いて、大勢の人に贈りました。昭和20年(1945)65歳の時、東京大空襲により住居が焼失し、丸森町館矢間で絵画の制作を行うようになりました。美しい色彩で、生き生きと描かれた弓弦さんの日本画は、多くの人々から愛されました。人々に絵を頼まれると快く引き受け、たくさん絵を残しました。88歳になっても弓弦さんは、手がふるえず、耳も遠くなく、足も達者で好きな絵を描くことができることに感謝し、「みんなに喜んでいただければいいんだから」と絵の制作に励みました。子どものころの夢を実現した弓弦さんは、74年間日本画一筋に打ち込み、94歳でその生涯を閉じました。この絵は、題を「小野道風」とし、昭和35年、弓弦さん80歳の時に描かれた絵は、今、丸森小学校の校長室に飾られ、子どもたちやお客様をあたたかく見守っています。



齋藤 弓弦 氏



題「小野道風」(丸森小学校 蔵)

【資料提供：丸森町立丸森小学校】

あんどう じゅうぞう
安藤 重三 (明治26年～昭和44年)

【主な業績】 丸森町内の小学校の校医，水道組合・健康保険の立ち上げ，町議会議員，警防団長

【業績の概要】

「先生，おらいの母ちゃんが腹いでえってうなっている。何とが助けでけらい。」



安藤 重三 氏

もう夜も更けたというのに，馬を引いた男の人が玄関の戸をたたきました。安藤重三先生は，すぐ往診の支度をして馬に乗りました。

「すぐ行ってやるから心配すんな。」そう言って，筆甫までの遠くて暗い，川沿いの道を馬で急ぎました。患者さんは，先生に診てもらったおかげで，腹の痛みがとれました。

「後で薬を取りにこいな。」先生が帰る頃には，東の空が明るくなってきました。それでも，嫌な顔一つせず，先生はどんな所までも往診してくれるのです。先生が家に帰ると，寝ずに待っていた奥さんは，着物を一枚縫い上げていました。広い丸森のどこまでも往診してくれる先生の帰りを待っていれば，そんなことも度々でした。

自動車も電話もなかった大正時代から，昭和の初めのお話です。丸森町内には，お医者さんが何人かいるだけでした。東北大学を卒業して，台湾や東京の病院に勤めていた若い安藤先生が，丸森に医院を開いたのは大正11年（1922）のことです。斎理屋敷の向かいに開業して，町のみんなの支えになったのです。先生は，丸森小学校や館矢間小学校，大張小学校の校医として，子どもたちのこともしっかりと診てくれました。先生は元気な子どもたちが大好きで，自分の子どもたちが田んぼで遊んで，泥んこになって帰ってきても叱るどころか，にこにこ笑っていたそうです。

「丸森の人はみんな，山水や井戸水を飲んでいるが，もし，はやり病が出始めたら大変だ。安心して飲める水道をみんなが利用できないだろうか。」

そこで，安藤先生は水道組合を作りました。また，健康保険を広め，お金のない人もみんなが安心してお医者さんに診てもらおうようにしました。お医者さんとしての活躍の他にも，町議会議員や警防団長，教育委員会委員長など，町の大切な仕事を引き受けてくれました。どんなときにも穏やかで，優しい人柄は，みんなに頼りにされていました。

「この間，おらいの父ちゃんば診てもらった時，金なくて支払できねがったんで，山のきのこば持ってきた。食ってけらいん。」

こう言って，時々，先生の家の手所（だいどころ）に，山の幸が届けられました。安藤先生は，お金のない人でも，どんなに遠くの人でも，いつでも診てくれたそうです。近くは自転車に乗って，遠くは馬に乗って往診に出かける先生は，町の誇りとして，名誉町民に選ばれました。

【資料提供：丸森町立丸森小学校】

おおつき まさみち
大槻 正路 (明治25年～平成元年)

【主な業績】 兄弟を大学に通わせて博士号を取得させ、「大槻4兄弟博士」とたたえられた。在京金山会の会長、金山図書館設立に協力。

【業績の概要】

明治38年、医者であった父の転勤で、住みなれた金山町（現在は丸森町金山）をはなれ、仙台東二番丁小学校高等科2年生になり、翌年福島県飯野村小学校に転校しました。明治40年、同校卒業と同時に姉の尽力で東京学院に入学し、明治45年に東北大学医学専門（医専）学校に入学しました。卒業後は、義兄綱島が経営する上川眼科医局に入りました。翌年鶴川に独立して医院を開業し、水沢町長内田紹衛（後藤新平・斎藤実の親戚）の長女、貞子さんと結婚しました。大正11年に慶応大学外科助手となり、大正15年に帝国女子医専外科教授となりました。昭和7年には、東京大学より医学博士の学位を受けました。



大槻 正路 氏

こうした時点で生活の転換を考え、大学をやめて、東京の蒲田（かまた）に大槻病院を開業し、久ヶ原に別宅をつくり、経営を順調に伸ばしました。しかし、昭和19年の空襲で家を焼かれ、岩手県姉妹村に疎開しました。推薦されて胆沢（いさわ）病院長や秋田湯瀬（ゆぜ）病院長として診療に当たっていましたが、戦後の昭和21年、久ヶ原で診療を再開しました。昭和27年には蒲田に病院を再建しました。昭和37年に当時の人気喜劇役者エノケンこと榎本健一の右足を壊疽（えそ）と診断して、普通なら切断することが当たり前の治療法でしたが、「切断は役者生活ができなくなる」として、切る部分を少なくして再起させたことが大きく新聞に載り、一段と有名になりました。

いっぽうで、医者をしてながら兄弟の世話（兄：菊男 医学博士 昭和天皇の侍医、弟：正男 農学博士、弟：虎男 理学博士）をしたり、地域社会に対して奉仕活動（城南仙台藩人会々長、梅屋敷公園保存会長、久ヶ原町会長）でも中心的に活躍したりしていました。このほか金山から東京に出て勉強する青年たちを書生（住まわせて勉強する）として面倒を見るなど、人のためにしたことは数限りないほどです。

大槻正路は、金山を故郷とする思いを強く意識していました。友だちの星泰三郎さんとの心の交流も大きかったこともあって、昭和8年に星泰三郎さんが「金山図書館を建設したい」という考えを出したときには、真先に賛成して、多くのお金や本を贈りました。また、当時冷害の被害があった金山を立ち直らせ、将来を担う青年に夢と希望を持たせようと、帝都見学生制度（国家の中心である東京を見学させる制度）をスタートさせました。お金は全部出して行き、当時の行政、教育機関などに大きな波紋を投げかけました。太平洋戦争中に一時中断しましたが、戦後に復活させました。

また、昭和15年には皇紀2600年記念の祝賀行事（神武天皇を初代に数えた行事）のときに、「母校の金山小学校に校歌がないのはさびしい。制定の考えがあるのならお手伝いしましょう」と申し入れました。作詞は作家の下村千秋さんに、作曲は新進気鋭の布施元さんに依頼し、コロムビアレコード社で円盤（レコード）化して、楽譜と共に母校に贈っていただきました。11月3日の明治節（文化の日）に発表、紹介されました。素晴らしいできればえに当時の金山町の人々もみんな感激しました。後輩たちに対する大きな贈り物であり、今もこの校歌が声高らかに歌い継がれています。

＜昭和38年に金山を訪問されたときのお話＞

「たばこをのんで叱られたこと。貯金をごまかし、そういうことはするものでないと諭された。大人になってもそれを金科玉條（絶対の教え）として守った。兄弟が助け合う美しい気持が、金山でつくられた」

※ 顕微鏡は大槻博士が実際に使用していたもの。
(金山小学校蔵)



昭和15年11月3日制定

下村千秋 作詩
布施元 作曲
大槻正路 寄贈

金山小学校校歌

一 鬼形峰と小富士山
そびゆる空の静けさよ
雉子尾の流れ 阿武隈の
うるおす土の豊かさよ
二 おお美わしのわが郷土
三 おお尊としのわが郷土

【資料提供：丸森町立金山小学校】

ひきち とくろう
引地 徳郎 (大正12年～昭和55年)

【主な業績】 抗がん性物質の研究，医学博士

【業績の概要】

引地徳郎氏は、大正12年2月9日、東京都小石川区坂下町に生まれ、昭和2年、父母の郷里である筆甫村（丸森町筆甫）に移住しました。

昭和10年3月筆甫小学校高等科を卒業し、一時農業に従事した後、おじさんの家で炭焼きや炭の運搬の手伝いするなど苦勞をしながら伊具農蚕学校（現在の伊具高等学校）で学びました。戦争が激しくなり、現役兵としてスマトラに従軍、終戦から6ヶ月後の昭和21年2月に復員しました。



引地 徳郎 氏

日本に戻ってからの引地徳郎氏は、「もっと学問をしたい」という強い思いを抑えることができず、昭和22年4月から東京獣医畜産専門学校（現在の日本大学生物資源科学部）に学びました。さらに、昭和25年4月からは多くの研究者が集まる北里研究所、昭和26年5月からは厚生省（現在の厚生労働省）国立予防衛生研究所抗生物質部に勤務し、抗がん性物質（がん細胞の細胞膜を破壊したり、増殖を抑えたりすることを目的とする物質）に関する研究に日夜打ち込みました。その研究成果をまとめた学位論文「一放線菌の生産する抗がん性物質，PEPTIMYCINの生物学的研究」を順天堂大学医学部に提出したところ、研究内容が認められ、昭和36年4月には医学博士になりました。

放線菌とは、カビのような微生物で、糸状の菌糸が放射状に伸びる細菌のことをいいます。土の中をはじめとする自然界に広く分布しており、病原性を示すものがありますが、中には抗生物質を産出する有用なものもあります。

このような自然界にいる微生物から PEPTIMYCIN（ペプチマイシン）という物質を発見し、抗がん剤（がんの進行や発病を抑える薬）に新たにこの物質を追加したことは、がん本態の究明とがん化学療法に対する新方向の展開に可能性を与えるものとして、その価値は当時の医学界から高く評価されました。

引地徳郎氏はその後、横浜港検疫所、羽田空港検疫所を経て東京検疫所所長として勤務していましたが、これからの活躍が期待される中、昭和55年9月28日、57歳の若さでお亡くなりになりました。

今日、医学の進歩は目をみはるものがあります。その陰には、引地徳郎氏のような研究者による地道な研究の積み重ねや発見があることを忘れてはなりません。

（参考文献 丸森町史）

【資料提供】 引地卓治氏（筆甫）
丸森町立筆甫小学校

おおうち すずみ 1848年 1922年
大内 晋 (嘉永元年～大正11年)

【主な業績】 大内小学校長 青葉熊野神社の神官

【業績の概要】

大内晋は、幕末の嘉永元年（1848）、大堀忠四郎の三男として宇多郡谷地小屋村（現相馬郡新地町）に生まれました。

明治2年、24歳の時に丸森町大内字青葉西に住む大内光重の養子となり、青葉熊野神社の祠官（神主）職を継ぐことになりました。

明治5年8月、日本で最初の近代学制制度が定められた翌年の6月に大内小学校が設けられました。晋は「主座」として読み書きを教えました。明治10年1月に師範学校上等科へ入学を命ぜられ、同年11月帰校して校長となりました。この地域出身の最初の校長として地域の教育の振興に大きく貢献しました。

また、明治8年前後に村の言い伝えや見聞きしたこと、気候や生活などについて、「謾録大内村誌」「伊手誌雑話」「漫録」「謾録詩文歌集」と題して冊子にまとめています。ふるさと大内では、東に鹿狼山、五社壇、地蔵森を仰ぎ、南西には手倉山、堂平山、中央を流る



大内 晋氏

る源流雉子尾川の細流を聞き、豊かな自然環境の中で多くの恵みを得、人々の協力や支え合いによって生活が営まれてきたことが分かるこれらの冊子は、ふるさとの貴重な歴史資料になっています。

このうち「謾録大内村誌」は、晋が、長年にわたり見聞したことをその都度書きとめ、政治、気候、風土、その時代の折々の生活、エピソード等を項目別に記したものです。

その冊子には、明治41年の皇太子（のちの大正天皇）殿下行啓記念として青葉分教所の新築が計画されたことが書かれています。それまでの校地が狭かったため校地の拡張が図られましたが、地主が応じなかったため、晋は青葉南抱屋敷を寄付し、青葉の各戸から働きに出てもらい、地ならしを始めました。

ところが、地ならしが半分ほど済んだ頃、金山、丸森、梁川を通って福島に至る鉄道の測量があり、校地の中央を通ることが分かりました。あと半分とがんばっていた青葉の人々は「みんながっかりした」と記録されています。

それでも何としても分教所の新築をとの思いは消えず、自分の桑畑を他の人の畑と取りかえることでようやく校地が確保でき、大正3年、ついに文部省新案とおりのガラス窓の校舎が立派に完成しました。

このように、晋は自ら地域の子どものための指導にあたりるとともに、学校の建築などの教育環境の整備にも力を尽くした地域の先人の一人です。

このように、晋は自ら地域の子どものための指導にあたりるとともに、学校の建築などの教育環境の整備にも力を尽くした地域の先人の一人です。

【資料提供：丸森町立大内小学校 大内地区協議会】

たかの まさみち
高野 正道 (1930年 2010年
昭和5年～平成22年)

【主な業績】 昭和62年1月14日から平成11年1月13日までの期間、丸森町長を3期務め、画一的な町づくりではなく、丸森の特性を生かした個性ある町づくりに尽力し、町の発展に多大なる貢献。

【業績の概要】

高野氏は昭和61年12月に丸森町長に初当選以来、3期12年間の長きにわたって丸森町の発展のため尽力しました。過疎化の進む丸森町において、「人と自然が共生する町づくり」を目指し、先見の目をもって産業復興や環境整備に取り組みました。

一つは、基幹産物である米やミルク（酪農）、シルク（養蚕）について推進し、特に米については、消費者に受け入れられる「コシヒカリ」の米作りを強力なリーダーシップの下に推進しました。この「コシヒカリ」は市場価格が高い米との評価から、米価が低迷する中でも生産農家の所得確保に貢献しました。そして、「コシヒカリ」の作付面積は昭和62年当時120ヘクタールだったものが、平成12年には532ヘクタールと飛躍的に増加しました。



また、“町づくりは人づくりから”と教育施設の整備と努力を惜しみませんでした。財源の確保に日夜奔走し、老朽化した学校の校舎の改築や体育施設の整備等に尽力するとともに、宮城県の市町村で初めて平成2年4月に生涯学習課を設置し、町民がお互いに学び合う体制を推進しました。



丸森町保健センター

さらには、生活習慣病の増加傾向に対し、健康こそが住民の最高の幸福であり健康づくりが急務として、平成2年に保健サービスの総合拠点となる「保健センター」を建設しました。平成12年度中に保健センターを利用した住民は本町内人口の1.5倍に上るなど、多くの住民に活用され成果を上げています。

そして、今や町のシンボルともなっている舘矢間バイパス丸森大橋の開通です。町の中心部につながる国道113号は、昭和4年に完成した「丸森橋」

が唯一のアクセス手段でしたが、道幅も狭く、大型車がすれ違うことも困難な状況でした。しかも、老朽化が指摘され、阿武隈川が増水した際は、安全確認のため一時通行止めになるなど、阿武隈川に新しい橋を建設することが、住民の長年の切実な願いでした。このような状況を踏まえ、高野町長は、町の中心部へのアクセス手段がこのような状態では、今後町の発展はあり得ないとの強い危機感を持ち、就任直後から丸森橋の架け替えを最優先課題として位置づけ東奔西走しました。そして高野町長の熱意が実を結び現在の橋が出来上がりました。



丸森大橋

この橋は、現在町のシンボルとして、住民の生活を支える大動脈となり、多くの人々に利用されています。

【資料提供：丸森町立小斎小学校】

ほんだ さんがく いっせい 1845年 1911年
本多 三學 一世 (弘化2年～明治44年)

【主な業績】 「ササニシキ」「コシヒカリ」の祖母米にあたる「愛国」の種もみの導入により稲作農家の収益増に貢献

【業績の概要】

本多三學一世（本多家14代）は、旧館矢間村で蚕種業「本多弘種館」を、南は九州熊本県まで全国的な規模で経営していました。

明治22年、農地の地主として、養蚕はもとより、稲作農家の収益を考え、静岡県旧賀茂郡大賀茂村（現在の下田市）在住の同じ蚕種業で、風交倶楽部の俳友として親交のあった外岡由利蔵氏から、品種名は分からないが収穫量の多い種もみを取り寄せ、旧館矢間村の農家で試作しました。その結果、10アール当たりの収量が420キログラムと、当時の平均収量の約2倍に達しました。

明治25年、伊具郡を担当した米作改良教師等は収穫量が多いのに無名であることから、品種名を「愛国」と命名し公表したことで、栽培農家が宮城県南部から、関東、北陸地域まで急速に広まり最大普及面積が30万ヘクタールを超す大品種となりました。この間「愛国」を基に品種改良が行われ、「陸羽132号」「農林1号」から「ササニシキ」「コシヒカリ」「ひとめぼれ」へと多くの優れた子孫を生み出し、日本の稲作に多大な貢献をしました。

「愛国」は、後に晩稲で多収穫品種の「身上早生」であることが判明しましたが、静岡県では、ごく平凡な品種として稲の生涯を終えています。

本多三學一世は、この平凡な「身上早生」が秘めていた優れた資質を見抜き、「愛国」という大品種に生まれ変わらせ、全国に広めました。しかも、旧館矢間村が「愛国」の栽培には決して適していない地帯にありながら、「愛国」の栽培に成功したのは、本多三學一世が稲作農家を督励し、稲作に高い技術を持った農家の栽培努力は無論ですが、その指導力や人間性に負うところが誠に大きいといえます。



本多 三學 一世 氏



本多三學一世と「愛国」の碑

現在私たちが日常に食している世界的な銘米、ササニシキやコシヒカリの祖母米にあたる「水稻米・愛国の種籾」を百三十年前に下田から東北地方に導入したのが本多三學一世であることが、元宮城県農事試験場長、佐々木武彦博士らの研究によって明らかにされたのが、平成二十年三月のことである。（中略）曾祖父の本多家十四代、本多三學一世の偉業を心から讃えるものである。

平成二十四年六月吉日
本多三學三世 記

「愛国」米の栽培は、昭和20年後半で途絶えましたが、現在丸森町内の一部で栽培されています。多くのおいしいお米の元となった「愛国」。地域の人々は「愛国」の発祥地が館矢間地区であることと、本多三學一世の功績を今でも讃えています。

【資料提供:丸森町立館矢間小学校】

さとう よろず
佐藤 萬 (明治34年～平成12年)

【主な業績】 大張村村長 丸森町助役
【業績の概要】



佐藤 萬 氏

佐藤萬さんは、明治34年9月、当時の大張村に生まれました。農家に生まれた佐藤萬さんは、戦中という時代背景もあり、軍馬を訓練する仕事にも従事していたそうです。

昭和17年(1942)から昭和21年(1946)にかけて、大張村議会議員として戦中戦後の混乱期にあった大張村のために様々な方面で活躍しました。

その後、昭和25年(1950)には大張村最後の村長となりました。当時は丸森の各村の町村合併がすすめられていました。大張村は全村が山地で、米や麦、繭、木炭に柿といった主産物はありましたが、人々の暮らしは決して豊かとは言えませんでした。

村の人たちは町村合併に対して不安を抱いている人も少なくありませんでした。佐藤萬さんは県や他町村の情勢を踏まえ、地域の人々との対話を通してその不安を和らげ、大張地区が更に元気になることを願い、町村合併推進の一端を担いました。

こうした業績から佐藤萬さんに対する地域住民の信頼は厚く、昭和30年(1955)新しく誕生した丸森町の最初の選挙で議員に当選しました。

丸森町議員となってから町の教育や財政に関する仕事などに精力的に取り組みました。中でも昭和33年(1958)に起こった丸森町の大水害の際には、担当として災害復旧に尽力しました。

また、昭和36年(1961)には大張中学校と耕野中学校の統合など、丸森町の誕生とともに起きた様々な問題の解決に力を注ぎました。

そうした大張地区のみならず丸森町全体のことを考えて精力的に働く佐藤萬さんは、昭和37年(1962)に丸森町の2代目の助役になりました。これまでの活躍を生かし、各分野において丸森町の発展に尽くしました。

そして昭和41年(1966)、助役を退任しました。その時、退任記念として校旗を母校の大張小学校に寄贈しました。

校旗には古くから養蚕の里として栄えてきた豊かな自然環境を背景に、自然と平和を愛する子どもたちの象徴として、楕円形の繭を中心に配した糸巻きを図案化し、いつまでも地域に開かれた学校であるようにという願いが込められています。

大張地区と新生丸森町の懸け橋となった佐藤萬さんは、誠実でとても几帳面な性格の持ち主である一方、奥様が作るお弁当が大好きだったという逸話も残っています。

【資料提供：丸森町立大張小学校】

やしま こうじ 1896年 1978年
八島 考二 (明治29年～昭和53年)

【主な業績】 地方自治，産業振興

【業績の概要】

八島考二は、明治29年3月23日、耕野村（現在の丸森町耕野）に生まれました。考二は、耕野尋常小学校を卒業後、白石中学校（現在の宮城県白石高等学校）に進学しました。しかし、向学心が強く、東京の大成中学校（現在の大成高等学校）に移りました。中学校を卒業した考二は、耕野村に戻り、役場に勤めました。昭和4年、32才のとき、多くの村民の支持を得て、村長に選ばれました。



八島考二氏の像

耕野村は山が多く、田んぼが少ない貧しい村でした。米が取れないため、養蚕や紙漉き、柿の栽培なども行っていました。そのような状況を憂えた考二は、「村を少しでも豊かにしよう」と考えました。まず、道路を広くしようと考えましたが、村内の道路は狭く、人がやっと通れるような曲がりくねった道ばかりでした。村民が「リヤカーが通れる三尺（約90cm）ほどでいい」と言いましたが、「これからは車の時代になる」と言って、一間半（約2m70cm）の道にすることを譲りませんでした。そして、道路が狭い所や不便な所は、自分の土地を寄付して道路を広げました。また、狭い村役場を、新しい役場に建て替えました。そのかかった費用の半分は、自分で出しました。その役場は、当時としてはモダンで、近くの市や町から多くの人が見に来たそうです。

昭和20年、戦争が終わり、たくさんの村人が帰ってきました。しかし、土地など財産を処分して大陸に渡った人々は、帰る場所に困りました。そこで、考二は自分の持っていた山を分け与え、引き揚げてきた人々を迎え入れました。「自分だけ楽しんではいけない」、そんな思いから考二は、住んでいた立派な家を出て、自ら山を切り開いて、畑や新しい家を作り始めました。しかし、その後も続々と戻ってくる人々に満足な生活をさせることはできませんでした。考二にはあるアイデアがひらめきました。栗駒山で温泉を営んでいた友人の父（菅原さん）に相談し、栗駒山のふもとを新たな開拓地として切り開くことにしました。しかし、そこは国有林、勝手に一本の木を切ることさえできませんでした。考二は自分で書類や地図を作成し、月に何度も県庁や古川の営林署、青森の営林署まで出向き、許可を得ようと努力しました。初めは断られていましたが、考二の熱意に押され、昭和23年、やっと国から開拓の許可が下りました。新しい土地の名前を「耕野」から「耕」を取り、さらにもっとよい土地になるように「英」とし、「耕英」と名付けました。その後、耕英分校の開校にも力を尽くしました。

また、昭和25年、「宮城県ころ柿出荷組合」を作り、初代の組合長になりました。「ころ柿」とは丸森町や白石市近辺で盛んに作られていた干し柿のことです。さらに「ころ柿」を盛んにしようと、「蜂や柿」や「平核柿」などの苗を、組合に1万6千本（100ha分）も寄付しました。この「ころ柿」の品質を改良し、東京や大阪などの大都市に送り、出荷量を大きく伸ばしました。そのような功績が認められ、昭和39年に黄綬褒章、昭和43年に勲六等単光旭日章を受章しました。

平成20年、岩手・宮城内陸地震が起き、耕英地区は震度6強という大地震に見舞われました。耕野の人々は心配になり、米をはじめ必要な物を送りました。逆に、平成23年の東日本大震災では、耕英の人々がヤマメなどを持ってきて、丸森町の祭りに参加するなど、今でも交流は続いています。その絆を作った、温厚で誠実な八島考二村長の銅像は、耕野まちづくりセンターに建立されています。

【資料提供：八島武雄氏，宮城県公文書館，宮城県ころ柿出荷協同組合，耕野小学校】

めぐる げんあん 1830年 1910年
目黒 玄安 (天保元年～明治43年)

【主な業績】 仙南の^{ほうそう}疱瘡の撲滅に向けて奔走した種痘医

【業績の概要】

天保元年10月14日、目黒数馬の長男として現在の丸森町字町東に生まれました。目黒家は、代々丸森の地にあつて医業を務める家柄でした。

幼い時に父を失った玄安でしたが、父祖の志を継いで医師になることを固く決心しました。そこで、玄安は相馬の侍医 半井宗玄、仙台の侍医 猪又松順、水戸の侍医 本間栗軒などを師として仰ぎ、十有余年にわたつて医術を学びました。そして、内科・外科の医術を極めました。

さらには、種痘の術（痘苗を人体に接種して、天然痘に対する免疫性を得させて、感染を予防する方法）を学修して帰郷し、丸森に開業しました。

当時、^{ほうそう}疱瘡は「天然痘」とも言われており、伝染力が極めて強い伝染病で罹患率（病気にかかる率）が高く、流行を繰り返して多数の死者が出る病気として、住民に恐れられていました。

種痘の術を修めていた玄安は、種痘を広めて何とかこの地域から疱瘡を撲滅したいと強く考えました。そこで玄安は、伊具・柴田・刈田・名取・亘理（宮城県）及び伊達・宇田（福島県）の各郡の人々に種痘の必要性を説いてまわり、予防接種に奔走しました。

当時、地方の人々には、種痘に対する知識や理解がほとんど広まっていなかったものと考えられます。そのため、人々に種痘という予防方法を理解して協力をもらうには、相当な苦勞があったものと推察することができます。

やがて、玄安の種痘のおかげで七郡の疱瘡罹患者は年を追うごとに減少していきました。ここに、この地域から疱瘡を撲滅して住民を救おうとした玄安の強い志と行動力のすごさを感じることができます。

仙南地方の種痘医は、目黒玄安をもって最初とされています。

明治21年7月、本人の功績が認められ、宮内庁より桐章木杯が授与されました。

(参考文献：丸森町史)

【資料提供：丸森町立丸森中学校】

志教育参考資料集

大河原教育事務所管内の偉人Ⅲ
～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～

平成26年2月24日 印刷

平成26年2月28日 発行

編集 宮城県大河原教育事務所

発行 宮城県大河原教育事務所

住所 〒989-1243 宮城県柴田郡大河原町字南129-1

電話 0224-53-3111